

樹林地保全の手法 フォレスト・マネジメント

フォレスト・マネジメントの話聞く機会がありました。実は昨年オープンフォレストが終わった直後に松戸市の秋山の森が活動を終了することになり、その事実が伝わった時に松戸の里やまグループに少なからず動揺が走りました。

住宅地の中にある樹林地で近隣からの苦情は絶えなかったこと、ケヤキの枝が敷地外に伸び、毎年処理にかかる費用も重なり、森を手放すことになりました。

市としてもできるだけことはやりたかったという思いは聞いていましたが、手の施しようがなかったというのが実際のところでした。

秋山の森はかつて住宅が建っていた場所でしたが、地権者の意向で森として残されてきました。松戸里やま応援団全体で運営する仕組みで運営し、地権者の方と話し合い樹林地保全が進められてきました。Save the greenという子育てグループも一緒になって、森で遊ぶをテーマにした活動が進んできました。若い世代の登場にすでに活動を始めていた里やま応援団のメンバーは新たな仕組みで子どもたち、母親たちと森で遊ぶメニューをいくつも開発してきました。

里山ボランティアとして私たちは森に入って活動をしていましたが、活動休止に至るまで地権者の方とコミュニケーションをとっていたのかと自問せざるを得ない状況でした。

残された樹林地を次世代へつなげていくその手法がまさにフォレスト・マネジメントというわけです。

公園を含めたみどりのあり方をまちづくりの中で考える自治体が次々にフォレスト・マネジメントを都市計画に盛り込んでいます。松戸市でも4月に公表される都市計画マスタープランに反映させるようです。

世界的に森林の減少傾向が問題視されています。そして松戸市でも残された98haの森林を残していくと助成金や基金を使った買取りで防ごうとはしているのですが、樹林地のほとんどが私有地で、買い取ると一口に言っても一か所の森を買い取るかどうかということだと思います。

樹林地保全の方法は今後審議を続ける方向ですが、わかっているのは「残していくべき」ということを市民にも、行政にもわかる手法にあるのだということのようです。大事だから残す。大事さはどんな点にあるのか。分かり易く評価することが必要だと思います。

樹林地の台帳を作ってどこにどんな状態であるのか。その見方考え方は大事だと思います。「守る、残していく」評価の手法は様々な立場からのアプローチがあるのだと思います。

なにより、樹林地はCO₂を吸収する大切な機能を持っていること。SDGsへの貢献が求められることから樹林地の保全については追い風になっているとの見方もあります。

里やま応援団は樹林地保全について今一度考えてみる機会を持ち、里やまボランティアとして新たな方向性を持つことも大事なのかなと思うのです。

(松戸市 藤田 隆)



花島公園に野鳥のオアシス

花島公園は千葉市花見川区の総合公園です。この公園に生息する野鳥の調査依頼を受けて昨年4月から毎月一度は必ず通っています。



以前にもこの公園で野鳥観察をしたことがありますが、いわゆる都市公園で大規模な住宅団地に隣接し、何時も賑わっている場所ですからあまり期待せず念入りに見ていませんでした。ところが毎月の調査をするうちに公園内の人工溪流とそれに続く池を中心にした水辺に多くの小鳥が見られることがわかりました。そこで調査する日には早出、調査後も居残り撮影する事にしました。

人工溪流は元の自然な傾斜を利用したものでポンプアップした水を循環させています。

特に野鳥が集まるのは最上流部の藪に囲まれた水の吹き出し口付近です。小鳥にとって藪は安全な逃げ場になりますから重要です。藪とせせらぎがセットになっていれば安心して水浴び、水飲みを利用して好都合です。セキレイ類は餌取り場としても利用してします。



写真は上段の左からキセキレイ・ハクセキレイ・セグロセキレイ・ビズイ・アカハラ・シロハラ・ツグミ・ジョウビタキ・キジバト・ヒヨドリ・アトリ・シメ・シジュウカラ・ヤマガラ・メジロ・アオジの16種

この花島公園では2月10日に自然観察指導員協議会が担当するバードウォッチングがあります。1日付の千葉市政便りに行事案内と参加募集が掲載されるそうです。

佐倉市 坂本 文雄

木の実・草の実・草の種〔その2〕

1 野鳥と木の実・草の実

野鳥と草木の実の関係について、その瞬間、その現場に巡り合うことは、とても楽しく、してやっぴりの（現行犯逮捕的？）思いに満たされます。本で読んで得た知識や一般論を語るよりも、自分の目で確かめ、自ら納得してその事実を語るの方が、指導員としても説得力があります。

左下の写真は、拙宅の庭にやってきたジョウビタキ。室内から窓ガラス越しに撮ったので少々分かりづらいですが、梅の幹に留まったジョウビタキ（写真右上）の視線の先にあるのは、ヤブランの黒い実（写真左隅）。この後、ヒョイと実に飛びついて幹に戻ったのは一瞬のことでした。このようなことが森の中でも起きているのだと思うと、そうだったんだ！と妙に納得し、とてもワクワクしてきます。

右隣は、茂原公園にて、ウドの小枝に留まった同じくジョウビタキ。こちらはまさにウドの実をついでいる瞬間です。同公園では園内のあちこちでウドを見かけます。右端は、同公園のクサギの枝に留まったキジバト。同じ辺りのクサギの木で何年か続けて同じような光景に出会いました。キジバトは同じ個体なののでしょうか。近づいてもすぐに逃げることもなく、じっくりと撮影することができました。



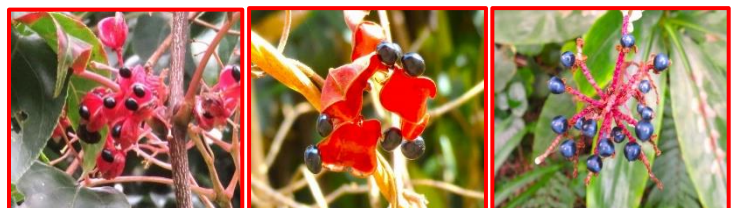
2 二色効果

クサギの実（上右写真）のように、赤い色のガクと紺色の実の二色が目立って、野鳥の注意を引く効果を「二色効果」と呼ぶそうです。そう言えば、この原稿を何度も手直ししているうちに気付いたのですが、上中央のジョウビタキの写真、こちらに写っているウド、何と実が黒くて花柄が赤いではないですか!?!こちらも二色効果と言うこと？及ばずながらちょっと考えてみたのですが、実を赤い色にするにはそれなりのコストがかかるので、別の部分を赤くしてコスト削減を図ったと言うことでしょうか。別の部分とは、ガクだったり果皮だったり花柄だったり、色々のようです。

下の写真は、とりあえず手元にあった写真で、左からゴンズイ、タンキリマメ、そして、どうやらヤブミョウガ（右下）の花柄もそのように思えます。タンキリマメの種子を試食してみましたが、とても固くてももちろん美味しくありませんでした。ヤブミョウガは種子をつぶしてみると、水分は無くまるで砂のようなもの（種子）が出てきました。野鳥たちは果皮や花柄の色に惑わされて、美味しくもない種子を食べさせられてしまうということ（植物たちの策略？）でしょうか。

なお、『ヤマシャクヤクの種子に「二色効果」はあるのか』（総合政策第23巻（2022）pp.95-103 Journal of Policy Studie）によれば、「ヤマシャクヤクは（中略）旧来「二色効果」を持つ典型的な鳥散布植物と言われてきた。しかし（中略）動物散布を確認できなかった。」としています。ただし、更に「二色種子を維持している理由については依然として不明のままである。」としていて、決して否定しているわけではありません。

どうやら「二色効果」かと思える姿かたちでも、そうでない事例もありそうです。そのような意味においても、一般論だけを語るのではなく、自ら確認（現行犯逮捕？）していただくこと（努力）が重要と、改めて思いました。



（記：茂原市 望月力智）